

狩猟採集遊動生活から定住生活への移行期におけるムラブリ

支援活動の評価

Evaluation of Mlabri support activities done in the transition
period from hunter gathering to settlement.

才田春夫、伊藤雄馬

SAIDA Haruo, ITO Yuma

狩猟採集を糧として森の中を頻繁に移動しながら生活していたタイのムラブリ族は、1982年以降、政府の森林保護政策強化により、ナーン県ファイ・ユアック村などで定住生活を送っている。その彼らに対してタイ政府は生業創出として鶏舎建設と鶏供与、養豚用の豚供与、生け簀と養殖魚供与など様々な開発事業を行ったが、二文字屋[3]によると殆ど成果を挙げていない。しかし、長期的なスパンで援助実績をみれば、必ずしも不成功とは言えないのではないだろうか。我々は、視点を代えて、これまでに実施されてきた開発援助について再評価を行った。これまで不成功事例が多く取り上げられてきたムラブリに対する開発援助について、長期的な視点から再評価を行った。結果、鶏の飼育がNPOに発展的に引き継がれていることや、保育所・給食サービスは児童の発育に好影響を与えていることが予想されるなど、評価できるものも存在することが分かった。また、特に評価の高い給食サービスの概要と、その影響を見るための身体測定結果を報告した。その結果、少しの差異は認められるものの、大きな格差は認められなかった。ムラブリの質素な食事から考えると、経済的に比較的豊かな近隣のモン族の子どもたちよりも成長が劣ることが予想される。しかし、予想に反して大きな差異は認められなかった。このことは、給食サービスが子供の成長の貢献している可能性が高い。

キーワード：ムラブリ族、開発事業、再評価、保育所、給食サービス

1. はじめに

タイ政府の山地民政策は1950年代に活発化し、1980年代に一端の収束を迎え、2002年の省庁編成によって事実上終焉を迎えた[1]。山地民のひとつに数えられるムラブリではあるが、Nimonjiya [2]、二文字屋[3]が指摘するように、ムラブリは他の山地民族に比べて開発の施策が遅れて開始

された。その理由を、Nimonjiya[2]は、ムラブリがタイ政府にとって脅威でなかった点を指摘している。他の山地民はカシ栽培や反政府ゲリラ活動などを行っており、政府にとって脅威であったため、彼らの活動をコントロールすることが求められていた。しかし、ムラブリはカシ栽培を行わず、ゲリラ活動も行っていなかったため、脅威とはならず、結果、他の山地民に比べて生活への介入が遅れたと考えることが出来る。

ムラブリに対する政策や援助は、宣教師によるもの、タイ政府と関係機関によるものがこれまでの研究では挙げられてきた[3]。その研究では、ムラブリを取り巻く政策の多くが不成功に終わっていると記している。

しかし、我々がムラブリを取り巻く環境調査を始めた2014年以降、過去にとん挫したと言われている援助プログラムの幾つかが、村人によって断続的にはあるが、継承されていることに気づいた。

本稿では、タイ王国ナーン県ウィエンサー市メーカニン郡ファイユアック村を対象に、これまでの主な施策が現在のムラブリの生活にどのような形で残存し、また影響（効果）が見られるかという観点から評価を行う。その中でも高く評価できる保育園の給食サービスについて簡単に紹介し、また、給食が健康に与える影響を見るために実施した、児童の身体測定の結果を報告する。

2. ムラブリの開発に向けたこれまでの主な取組み

1980年代前半～：アメリカ人宣教師による開発計画（プレー県）

1980年代中頃～：ムラブリを対象とした政府の開発計画開始（ナーン県）

1990年代後半：定住生活が本格的に始まる（ナーン県）

2007年：シリントーン王女がナーン県ファイユアック村を訪問、王室プロジェクトが始まる。（ナーン県とプレー県）

●ファイユアック村で行われた具体的な開発プロジェクト

- インフラ整備（道路、水道、ソーラー発電、トイレ整備）
- 家屋の建設
- 代替生業としての家畜飼育（牛、豚、鶏、魚養殖、果樹、野菜）。
- エスニック・ツーリズムの導入
- 教育（保育所・小学校・タイ語・タイ文化）
- 給食サービス（保育所）

3. 開発援助プロジェクトの評価

開発援助プロジェクト、特に地域住民を対象とした直接支援型プロジェクトは数年間で成果が求められる。成果が目に見えることによってプロジェクト実施当事者も支援対象者も納得がいく。一般的にプロジェクトの評価は、実施期間途中と期間終了後に行われ、成果と問題点、改善点等が洗い出され、その後の援助の必要性や方法等が検討される。成果が得られなかったプロジェクトがあるとすれば特に、その原因を究明し、他の援助に活かすことが求められる。タイ政府がこれまで行ってきたムラブリに対する援助内容とその成果については二文字[3]が報告している。開発

援助が政府の一方的な思惑で実施され、ムラブリの意思や自主性を尊重しなかったために多くのプロジェクトが不成功に終わっていると指摘している。

二文字[3]が報告するように、個別のプロジェクト単位で結果をみると「不成功続き」であろう。しかし、長期的なスパンで援助実績をみれば、必ずしも不成功だったとは言えない点も見出せるのではないだろうか。我々は、これまでに実施されてきた開発援助を再評価することにした。評価のポイントは以下のとおりである。

- ①何らかの形でムラブリの生活影響を与えていか。
- ②それらのプロジェクトがどのような形でムラブリに取り入れられているか。
- ③実施された事業、導入されたシステムや機材等が、ムラブリ自身の手で維持管理されているか。
- ④あるプロジェクトを継続させるために第3者が関与しているか。

4. 評価結果

評価はインフラ整備、生業としての家畜飼育、教育文化事業の3分野に分け、それぞれを表1-3にまとめた。

表1. 政府による開発プロジェクトとその評価 (インフラ整備)

	政府の継続的な支援	住民による維持管理	効果	④民間組織の関与、その他
水道設置 (村内に3カ所)	○	○	○	破損した水道管の修理や水源の維持管理を住民が行っている
ソーラー発電機の導入	×	×	一時的	破損したままである。
トイレ整備とその利用	○	○	○	一部はきれいに使われている。頻繁に新設されている。

村内の道路は住民自身の手で整備されている。また、共有地の草刈りなども自分たちで行っている。維持管理に経費や特殊技術が必要なものは維持管理の点で難があるが、水道やトイレなどは維持管理がなされている。

表2. 政府による開発プロジェクトとその評価 (家畜飼育と作物栽培)

プロジェクトの種類	政府の継続的な支援	住民による維持管理	効果	民間組織の関与、その他
養牛	×	×	×	現在は行われていない。
養豚	×	○数軒のみ	○自家食用 ×生産販売	
養鶏	×	○	○自家食用 ×生産販売	IMPECT (後述) が技術指導意欲のある若者15人が輪番制

魚養殖	○	△断続的	○自家食用 ×生産販売	過去の養殖プロジェクトが定着しているとは言い難いなかで、2017 新養殖池建造工事開始
果樹栽培	×	△	○自家食用 ×生産販売	果樹を生業にするほどの土地はないが、村内に数種の植樹
野菜栽培	△	△	○自家食用 ×生産販売	インフォーマル教育局 (DNFE) が指導
稲作	×	△	○自家食用 ×生産販売	有機米栽培プロジェクトは産業としては不成功だが、自家用として栽培している住民が少数いる。

開発援助の目的が産業の育成とそれに伴う経済的向上にあるとすれば、何れのプロジェクトも成功とは言えない。しかし、ひと世代前まで狩猟採集生活をしていたムラブリが、農作物を自家用に栽培しようという動機づけになった点では、政府によるこの種の開発プロジェクトは成功したとも言える。先ず自家用に栽培し、余剰産物を販売するというは自然の流れであり、自家用栽培を繰り返すなかで、美味しいものの味を覚え、より品質のよいものを作るための技術を磨く「段階を踏む」ことが重要である。従って、現段階では家庭菜園程度の農業ではあるが、自らの畑を耕し、家畜を買う住民が出てきたことは、タイ政府の飽くなき挑戦の結果であると言えよう。

こうした農業や畜産を生業として育てるには、栽培や飼育技術の指導、販売に関する知識やマネジメントなど、彼らに寄り添ったアドバイスが必要である。この点で、少数民族が少数民族を支援するための NPO 組織、IMPECT: Inter Mountain People's Education and Culture in Thailand は、ムラブリにとって大きな存在といえる。タイ政府がムラブリ開発のひとつとして 2008 に養鶏を導入。鶏舎と鶏を与えたが、適切な技術指導を行わないため不成功に終わっていた。それを IMPECT が産業として育てるために再度取組みは始めている。彼らは、意欲のある若者 15 人の鶏舎管理チームをつくり、輪番制で管理する仕組みづくりをしている。チームのやる気を引き出し、必要に応じてアドバイスをする。あくまでムラブリの自主性を尊重しながら、技術の定着を図っている。政府開発事業が実を結ぶためには、より近い立場から継続的に支援を担う IMPECT のような組織が必要であろう。

表 3. 政府による開発プロジェクトとその評価 (教育・文化事業)

プロジェクトの種類	政府の継続的な支援	住民による維持管理	効果	民間組織の関与、その他
保育所建設と運営	○	-	○	タイ人教師 2 名の派遣。 欠席児童少くない
教育推進 (義務教育の無償化と通学促進)	○	-	○	欠席児童少くない

社会人教育の実施（識字教育）	△	-	△	過去継続的に行われ、成果があった。現在は、ほとんど教育活動は行われていない。
独自文化の保存と継承	×	○ 新年祭り	自主的活動へ	ムラブリ文化継承の一環として、祭りを行政主導で行ってきたが、IMPECTの協力により自主的な開催を目指している。
給食サービスの無償提供（保育所）	○	-	子どもの栄養と成長に寄与	厚生省発行の Nutrition Flag に基づいた栄養管理の実施

教育面では、子どもの教育だけでなく、社会人教育も行われてきた。政府機関のインフォーマル教育局が社会人に対してタイ語の読み書きを含め、野菜栽培などの職業教育を行っていたが、現在は下火になっている。

子どもの教育制度は比較的早期から着手され、2015年には新しく建物が建て替えられるなど、継続的な発展が見られる。2017年現在、1歳から6歳までの児童25人が通っている。タイ語教育、生活指導、給食サービス等が行われている。給食サービスをありがたがる親の声も多く、この保育所及び給食サービスは、最も成果のあった施策と考えられる。次節では、この保育所の特に給食サービスについて紹介する。

5. 保育所の給食サービスと健康管理システム

保育所には無料の給食制度がある。給食はナン県の郡役所の管轄の下で運営されている。給食は、ファイユアク村から車で30分ほど離れたパーペ村の給食センターで調理され、その後配達される。

表4はある時期の給食メニューである。肉、野菜、果物などバランス良く盛り込まれている他、牛乳も配布される。これは、タイ政府が出している Nutrition Flag, Health Eating for Thais[4]に基づいて、必要なカロリーと栄養が適切に配分されている。加えて、各保育園では3ヶ月毎に身体計測を行い、成長が遅れている子どもに牛乳と卵が与えられる。

1食辺り20バーツ≒60円、牛乳は1パック7バーツ≒20円であり、費用は行政が負担する。保育所に通った児童にのみ給食は支給される。

この給食サービスは、ムラブリ児童の健康状況に少なからぬ影響を及ぼしているものと予想できる。我々は2017年3月、給食の児童に与える影響に関する研究の予備調査として、ムラブリ及び同じ村に住むモン族(Hmong)の児童の身長・体重を調査した。次節では、その調査結果を示す。

表4. 給食メニュー

2016/8/31	キノコ炒め	卵スープ	スイカ
2016/9/1	グリーンカレー	卵焼き	スイカ
2016/9/4	揚げ魚	卵スープ	スイカ
2016/9/5	瓜炒め	ゆで卵	スイカ
2016/9/6	揚げ鳥	卵スープ	スイカ
2016/9/7	キャベツ炒め	卵焼き	スイカ
2016/9/8	白菜炒め	ゆで卵	スイカ
2016/12/18	魚白菜炒め	卵スープ	ナツメ
2016/12/19	野菜豆腐煮	卵スープ	ナツメ
2016/12/20	キャベ炒め	卵スープ	ナツメ
2016/12/21	甘辛炒め	卵スープ	ナツメ
2016/12/22	炒飯	卵焼き	ヒカマ

6. 児童の身長・体重調査

2017年3月、ムラブリとモン族の児童の身体計測を行った。図1～6は、計測した児童の身長、体重データを、タイ厚生省の作成した「タイ児童標準成長曲線」[5]にプロットしたものである。ムラブリは男子10人と女子13人、モンは男子18人と女子17人の計測を行った。

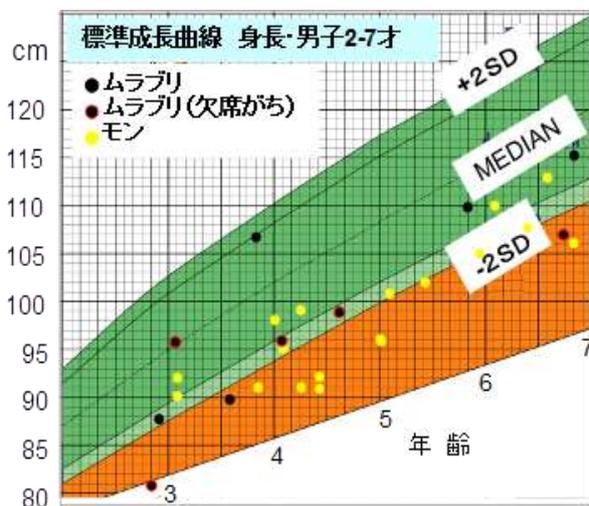


図1. ムラブリとモンの男子身長比較

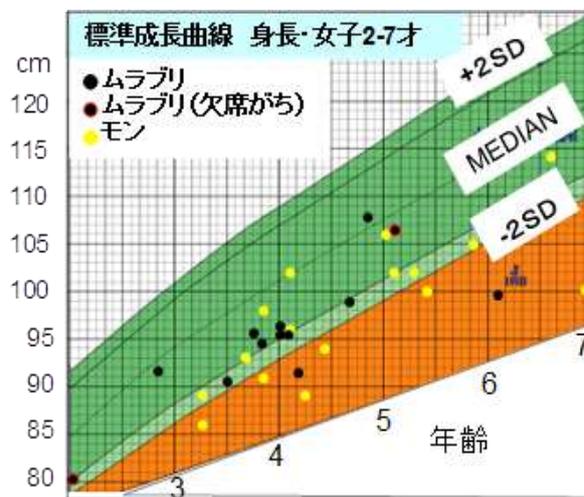


図2. ムラブリとモン、女子の身長比較

まず、身長を見る。図1・2はムラブリとモンの身長比較である。ムラブリは●、赤い輪郭の●は欠席がちなムラブリ児童を表す。黄色●はモンである。ムラブリは男女とも殆どの児童が2SD以内に入っている。これに対してモンは、男子の半数近く、女子の三分の一が-2SDを下回っている。

次に体重測定の結果を示す。図3・4の体重をみると、標準より低いものの、ムラブリとモンのいずれもが、2SD以内に入っている。

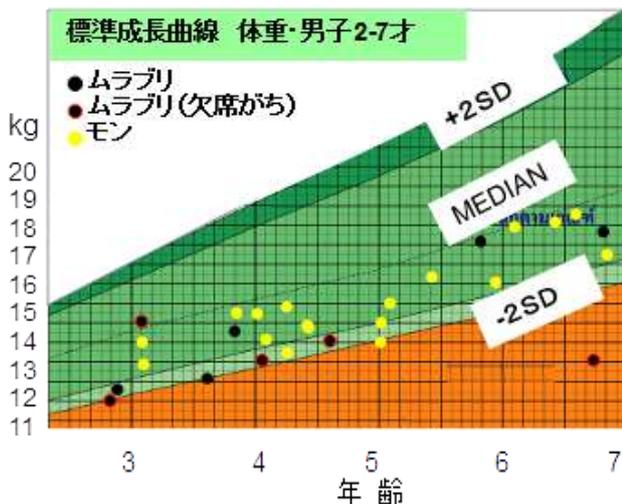


図3. ムラブリとモン、男子の体重比較

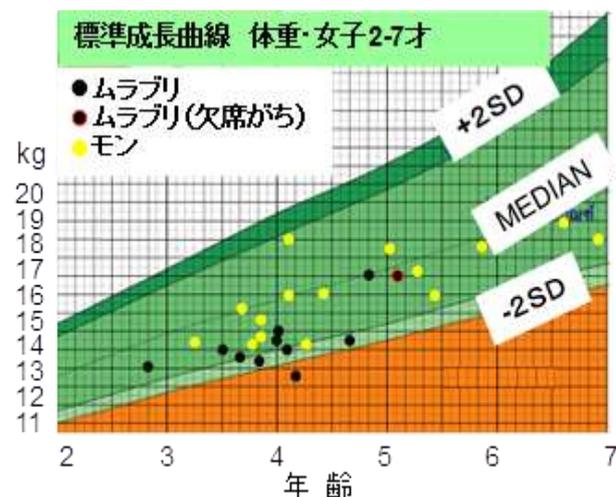


図4. ムラブリとモン、女子の体重比較

図5・6は体重と身長割合を見たグラフで、縦軸に体重を横軸に身長をプロットしている。図5は男子、図6は女子のものである。このグラフには年齢要件が加味されていないため、年齢相応の成長をしているかどうかはわからないが、体形の違いは見て取れる。ムラブリはやせ型、モンはぽっちゃり型の特徴が見て取れる¹。

男女ともほぼ全員が2SD内に入っているが、モンがムラブリよりも高い。この違いは栄養摂取量に起因するのか体質によるものかは一概には言えない。今後の課題とする。

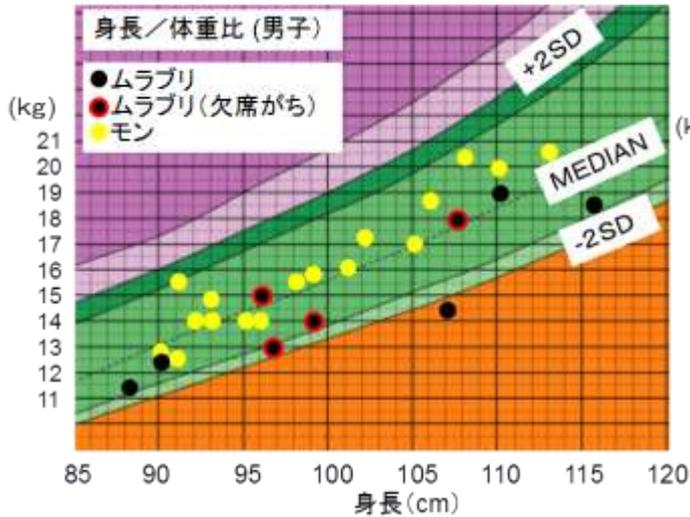


図5. 体重に対する身長の割合 (男子)

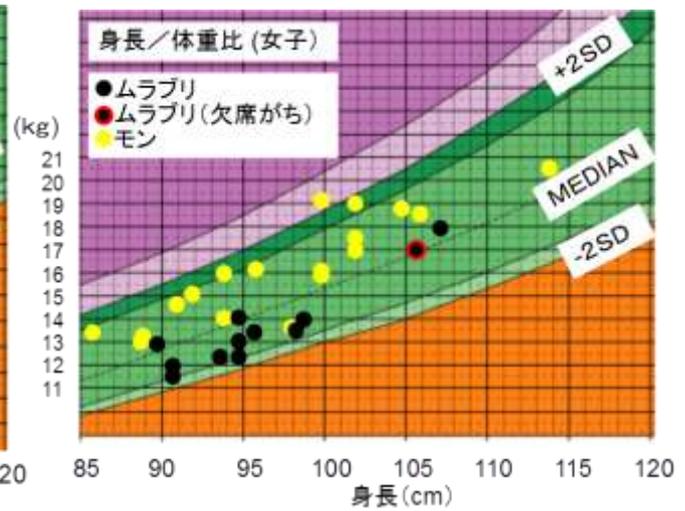


図6. 体重に対する身長の割合 (女子)

7. まとめ

本稿では、これまで不成功事例が多く取り上げられてきたムラブリに対する開発援助について、長期的な視点から再評価を行った。その結果、政府開発プロジェクトとしての養鶏事業は開始後1年で途絶えた。二文字屋はこの時点で政府の養鶏プロジェクトは不成功に終わったと判断している。しかし、その後、NPO (IMPECT) に発展的に引き継がれていることや、保育所・給食サービスは児童の発育に好影響を与えていることが予想されるなど、評価できるものも存在することが分かった。また、特に評価の高い給食サービスの概要と、その影響を見るための身体測定結果を報告した。その結果、ムラブリの子供たちは、比較対象のモン族の子供たち大きな体格差は認められなかった。

大きな差異が認められなかった要因として、給食サービスが考えられる。これまでの観察で、ムラブリの食事は質素であることが分かっている。主食のコメと野菜スープのみである場合がほとんどで、肉や魚などのタンパク質は少なく、雇用主であるモン族からの食材提供の無い日は3

¹ 我々が計算したカウプ指数とローレル指数でもムラブリは痩せ気味が多く、モンは肥満気味の子どもが多い結果となった。両指数ともタイでは使用されていないため、日本の児童の基準値を使って発育状態を判断したが、各年齢における体重と身長の関係と相関性があることから、タイ児童にも日本の基準値が当てはまるものと考えられる。

食を食べないという家庭が多かった。ムラブリ族はモン族の農作業に雇用され、与えられる賃金や提供される食材によってその日の食事回数も内容も大きく変わる。二文字屋の調査 (2014) [3]によると、モン族の年収は6万~40万バーツ、ムラブリ族の年収は2万~11万バーツと経済格差は大きい。ムラブリの低収入と質素な食事から考えると、経済的に比較的豊かなモン族の子どもたちよりも成長が劣ることが予想されたが、大きな差異は認められなかった。このことは、給食サービスと健康管理システムが大きな要因となっていると考えられる。幼稚園では3ヶ月毎に身長、体重を計測しており、体重減少や体格の劣る幼児には牛乳などが別途配給される。今後、家庭での食事調査を詳細に行い、また児童の身体測定をより網羅的・継続的に実施することで、給食と成長の関係を明らかにしていきたい。

謝辞：

本研究は公益財団法人富山第一銀行奨学財団の助成を受けて実施したものです。ここに感謝申し上げます。また、ご協力頂いたラーチャモンコン工科大学ナーン校のサッカリン・ナ・ナン博士、ムラブリ幼稚園のパカワン・カーレック先生、オーンチョン・ティアイー、モン幼稚園のラッカナー・ピンムワン先生に感謝申し上げます。

参考文献：

- [1] 片岡 樹、先住民か不法入国労働者か？—タイ山地民をめぐる議論が映し出す新たなタイ社会像、東南アジア研究(2013), 50(2) : 239-272
- [2] Nimonjiya, Shu, Edible Culture and Inedible Culture: Ethnic Tourism of the Mlabri in Northern Thailand. In Rethinking Asian Tourism: Culture, Encounters and Local Response, edited by Ploysri Porananond and Victor Terry King, 95-118. Cambridge: Cambridge Scholars Publishing, 2014
- [3] 二文字屋 脩、終わらない開発：ポスト遊動狩猟採集民ムラブリの開発をめぐる現状分析、東南アジア研究(2017), 54(2) : 205-236
- [4] Working Group on Food-Based Dietary Guidelines for Thai People, Manual Nutrition Flag. Nutrition Division, Department of Health, Ministry of Public Health, 2001
- [5] Saiwongse Saiwongse, Nuttawan Chaolilitkul, Yupa Poonkhum, Thailand Country Report for Regional workshop on National nutrition surveillance Kathmandu, Nepal, 2009